

(五) 殞もろがり

覚悟はできているつもりだった。それでも草壁の薨去こうきよを聞いた時、菟野は独り、部屋に籠もった。
(負けた。)

体中の力が抜けていく。腑抜けた顔を誰にも見せたくなかった。

(素直な良い子であったのに。)

二十八歳の息子も、菟野にとっては何時までも子供だった。幼い頃の草壁の姿が、走馬灯そうまどうのように現われては消えていく。

時鳥ほととぎすが一声、空をつんざく。

(草壁か。)

身を翻ひるがえして庭に飛び出るなり、空を見上げた。いない。草壁は勿論、時鳥の姿も見えない。軒下の白い卵の花だけがむなしく頭を垂れている。

(いるわけがない。あの子は死んだのだ。)
肩を落として部屋に戻る。

草壁を大王にする。それだけが菟野の生き甲斐になっていた。辛いつらことも悲しいことも草壁のためだと思えば耐えることができた。その草壁が死んでしまうとは。いったい今日まで何のために意地を張ってきたのか。鼻の奥が熱い。やがて、暖かい涙が一筋頬を伝った。めったに見せることのない涙である。涙が菟野に生きていることを実感させた。

(涙の、なんと暖かいことか。あの子が死んでしまったというのに私はまだこうして生きている。)

辛い。代われるものなら代わってやりたかった。一度涙が出ると後から後へと堰を切ったように溢れ出す。溢れた涙の暖かさが菟野の乾いた心を潤うるしていく。菟野にとっては新鮮な驚きだった。

(人は悲しみを癒すために泣くのだろうか。)

陶然とうぜんとして一人菟野は泣き続けた。机につつ伏した菟野の肩が震え、呻うめくような低い嗚咽おえつが漏れた。

机上に溜まった涙が、池になった。池の底に棲みついた青竜が菟野の泣き顔を見上げて不気味に笑っている。

「また現われた。しつこい奴。草壁を奪ったのはやはりそなたか。」
悲しみの余り、我を忘れた。

「おのれ・大津。草壁を返せ。」

菟野は短剣を抜くと、すかさず机に突き立てる。が、それより速く卓上の池を飛び出した青竜が爪を立てて菟野に襲いかかった。

「ね。お母様。まぶたの中でお目が動いたようにみえません。」

「本当。確かに動いていますよ。皆でお呼びしたらお目が覚めるかも知れませんね。」

「おばあ様。おばあ様。」

「大后様。大后様。」

「おばあ様。おばあ様。」

（誰かが肩を揺すっている。小さな暖かい手。そうだ。あの声は軽。氷高もいる。大勢集まって何をしているのか。そうだ。竜だ。大津だ。）

いきなり起き上がろうとした時、柔らかな手がそっと制した。

「お気がつかれましたか。」

阿閉がホツとしたように声をかける。十年余りも連れ添ってきた夫が亡くなったのである。阿閉だって何もかも放り出して泣いていたい。大海人が亡くなった時にも涙ひとつ見せなかった菟野が、覚悟していたはずの草壁の死に倒れたのには驚かされた。内心、鼻白む思いだった。

菟野が倒れたことと草壁の死は阿閉の指示で内々に伏せられた。菟野に倒れられて全てが否応なしに阿閉の肩にかかってきた。政治に距離を置いてきたとは言え、阿閉もまた宮中の駆け引きの中で育ってきた。草壁の死を公にする前に次の手を打っておかねばならない事ぐらいはわかっている。侍女たちには指図をしながら、阿閉は自分の冷静さに驚いていた。

（私は夫の死が悲しくないのだろうか。）

熱く燃えるような恋こそなかったけれど、この十年余り、心は十分に通い合ったつもりである。やれるだけのことはやったという充実感もあった。大王にしようなどと考えなければもっと長生きできたであろうに。菟野が恨めしかった。

（悲しくないのではなくて、悲しんでいる暇がないだけだ。）

精魂込めて看病してきた。疲れきっていた。目標を失ってポカリと穴の開いたような虚しさを、自分だってゆっくりと癒したい。だから、菟野の回復は心底嬉しかった。

（大后様も泣いている暇がなかったただけなのかもしれない。）

菟野の気持ちがおんの少しわかったような気がした。

菟野は目を開けて辺りを見回した。

「皆揃ってどうしたのです。」

「まあ。おばあ様だったら。どうしたのかですって。お部屋に倒れていらしたのですよ。もう三日も眠っておられましたのよ。」

氷高が嬉しそうに事情を説明する。父を失った上に祖母にまで倒れられて、不安に胸を痛めていた氷高である。母の心痛をも思いやれる年になっている。祖母の回復は何より力強い。

「三日も。」

「そうですよ。ピリツとも動かれないのだから、心配していたのですよ。」

軽も横から口を挟む。軽はもう七歳になっていた。喜んで跳ね回る吉備の手を抑えて注意するしぐさが可愛い。後ろに控えていた乳母が慌てて吉備を抱き上げる。居並ぶ女官たちの間に安堵あんどと共に和やかな空気が流れた。軽の乳

母県犬養三千代の福々しい顔がひとときわ晴れ晴れと綻ほほむぶ。

阿閉から温かい飲み物を受け取ると、菟野はゆつくりと時間をかけて飲み干した。萎なえて乾ききった体中に温かい潤いが染み渡って、腹の底からフツフツと力が沸き立ってくる。(まだまだ、負けてなぞ、いられない。衣の襟を正すと、もういつもの威厳を取り戻していた。

「すっかり皆に心配をかけてしまったようですね。でももう大丈夫です。有り難う。」

菟野の目は、軽に釘付けになっている。目の覚める思いだった。

(草壁のことばかり考えて、子供たちのことを忘れていた。こんなに私のことを心配してくれる子供たちがいるではないか。こんなに私のことを頼りにしてくれる子供たちがいるではないか。しつかりするのだ、菟野よ。)

自分で自分を叱咤しつたげ激励する菟野である。

(それにしても軽の、なんと草壁に似ていることか。そうだ。草壁の代わりに軽を大王にしてやらねば。放っておけば大王の位は他の皇子のところへ行ってしまうって、軽はこのまま埋もれてしまう。軽を大王にするにはどうすればよいのか。)

なぜ草壁が死んだのか、菟野には何もわかってはいない。

翌日、菟野に召されて駆けつけた佐留は、宮中のただならぬ気配に胸騒ぎを覚えた。

「草壁皇子様が亡くなられたのです。」

宮人が右往左往する中、女官たちが泣いている。草壁の病が重いことは佐留の耳にも入っていた。佐留は急いで菟野に拝謁した。部屋の入り口には大嶋が控えている。嫌な予感がした。菟野の眼に涙はない。

「佐留。草壁皇子が亡くなられたことは聞いたであろうな。」

「は。まことにおいたわしく、心よりお悔やみ申し上げます。」

「大王既になく、皇子も亡くなられた。日継は如何すべきか。佐留は仰天した。」

「恐れながら、国家の大事、私の如き下賤の者のお答えできることではござりませぬ。」

菟野は頷いた。

「されば、私が大王になろうと思う。」

佐留は深々と拝礼した。菟野はかすかに微笑んだ。だが、その眼は笑っていない。

「ただし、私は大王の后として即位するのではない。日神として即位するのです。」

「太后様が日神。」

佐留は耳を疑った。

「これまでの神々の物語に大嶋が少しばかり手を加えました。詳しいことは大嶋に尋ねなさい。そなたは草壁の葬儀の席で、私が神としてこの国を治めること、これは神代からの約束事であることを歌うのです。」

草壁皇子の殯宮の前。高官たちの弔辞が一通り終わると、楽官頭柿

本朝臣佐留は立ち上がって前に進み出た。深々と拝礼して、それからおもむろに頭を上げると、ゆつくりと居並ぶ人々を見渡す。皆一様に佐留に注目し、佐留が歌い出すのを待っている。この時の佐留は、当代第一の歌人『人麻呂』になっている。汗が流れる。歌には自信がある。これまでどんなに暑くても、歌を詠む時に暑さを感じたことなどなかったのに。

『人麻呂』は大きく息を吸い込むと、低くしのびやかに、しかしはつきりと歌い出す。

天地の初めの時 ひさかたの天の河原に

八百万千万神の 神集い集いまして

神はかりはかりし時に

天照らす日女の尊 天をば知らしめすと

ざわめきが起こった。

「天照日女尊って何だ。」

「天照大神のことではないのか。」

「ばかな。天照大神は男神だぞ。」

初めて聞く名だった。人々のざわめきの中に、いつかのあの星の降る夜の男もいる。穏やかな笑みを含んだ大きな瞳はクルクル動いて周りの人々の表情

をしつかりと捉えている。

『人麻呂』は続ける。

葦原の瑞穂の国を 天地の寄り合いの極み

知らしめす神の命と 天雲の八重かき別きて

神下し座せまつりし 高照らす日の皇子は

飛鳥の浄の宮に 神ながら太敷きまして

天皇の敷きます国と 天の原石戸を開き

神あがりあがり座しぬ……

(167)

この葬儀の席に菟野の姿はない。だが、人々は眼に見えない菟野の威圧をひしひしと感じ取らざるを得なかった。「天照日女尊」がこの国を治める大王として草壁を遣わされた。だが草壁は、この国は「天皇」が治めるべきだと、天上へ帰ってしまったというのである。今、「天皇」と言えるのは菟野しかない。とすると、これは草壁の死を悼むと同時に、菟野の即位宣言でもあるのだろうか。菟野は『人麻呂』の口を借りて自らの即位を宣言したのだろうか。

『人麻呂』の歌はまだまだ続く。『人麻呂』が歌い終わると下手で百人の歌人たちが声を揃えて繰り返す。それから草壁の舍人たちが二十人、一人ずつ立って皇子の死を悼んで歌い上げる。最後にもう一度歌人たちが『人麻呂』の歌を畳み込むように繰り返す。そこから人々は、菟野の強い意思を読み取ったのである。

「疲れた。」

身も心もくたくただった。恋の歌ばかり歌ってきた佐留にとって、この日の歌は余りにも荷が重すぎた。後味の悪い歌だった。何もかも忘れて休みたかった。気がつくとも牟久売の家の前だった。

「どうしてあんな歌を歌ったのです。」

牟久売は機嫌が悪い。

「どうもこうもない。太后様のご命令だ。」

「大津皇子様と草壁皇子様が亡くなりましたのですよ。次に大王になられるのは長皇子様か弓削皇子様を置いてほかにはありません。あなたもしつかりなさって下さりませ。」

妻の牟久売は大江皇女に仕えている。佐留も大江の息子の長皇子と弓削皇子の幼い頃から大江の宮に出入りして、歌の手ほどきをしてきた。浄御原宮大王亡き今、長と弓削の兄弟は、佐留にとっても主君とも言うべき存在である。

「さあ。今は無理だな。太后様はご自分が大王になれるおつもりだ。そればかりか皆の反対を抑えるために、ご自分が神になるうとしておられる。俺はご命令のままに歌を歌わねばならぬ。長皇子様や弓削皇子様にも自重して頂いた方がいい。今、下手に動いたら、大津皇子様の二の舞だ。太后様は恐ろしいお方だ。」

詩人の目はあの日の菟野の冷静すぎる表情の奥に、狂おしいまでの悲しみが宿っているのを見て取っていた。抑えつけた悲しみが、何時どのような形で現われるか、佐留にも予測がつかない。

秋になると、神祇官に官人たちを集めて、中臣大嶋が出来上がったばかり

の『天神賀詞』を読み上げた。これには大嶋が新しく手直しした皇祖神の系譜が連ねられている。それが終わると、菟野はまた吉野に登った。深山に漂う霊気の中で、菟野は神と一体になった。

年が明けて正月元旦。物部麻呂が大宮の前に大楯を立てて警護する中、並み居る官人たちの前で忌部色夫知が剣、鏡を奉って、ここに菟野が正式に即

位した。次いで神官伯中臣大嶋がそのさびのある声で、『天神賀詞』を讀み上げる。終わると大嶋と色夫知が菟野に向かって高らかに手を拍って恭しく拝礼した。官人達は戸惑った。手を拍つのは神に対する儀礼である。では菟野は神なのか。一同はここで改めて『人麻呂』の歌った『天照日女命』が菟野自身であることに思い至った。そんな馬鹿な。目の前の一人の女性が神だなんて。だが、どうして異を唱えることができよう。皆、複雑な思いで一斉に手を拍った。

佐留は多忙だった。草壁の殯の宮での歌は菟野の期待以上の出来映えだった。菟野は佐留の位を上げ、どこへ行くにも佐留に従駕を命じた。『人麻呂』は菟野の報道官のようなものであった。

菟野が雷丘に登って国見をした時の歌は、特に人々の喝采を浴びた。

大王は神にしませば

天雲あまくもの雷いかづちの上に庵いほらせるかも

(235)

替え歌が次々に作られ、神としての菟野を讃えた。今や「大王II神」の構図が出来上がりつつあった。

菟野は即位してからも神のエネルギーを補充するかのようになり、三ヶ月に一度は吉野に登った。ここでも『人麻呂』は歌う。

やすみししわご大王 神かむながら神かむさびせすと

吉野川たぎ激つ河内に 高殿を高知りまして

登り立ち国見をせせば

畳たたなづく青垣山 山神やまつみの奉る御調まつぎと

春べは花かざし持ち 秋立てば黄葉もみぢかざせり

逝ゆき副そふ川の神も 大御食おほみけに仕つかえ奉まつると

上かみつ瀬うかわに鵜川うかわを立ち 下しもつ瀬うかわに小網こなさし渡す

山川も依りて仕ふる 神の御代かも

(38)

当代第一の歌人『人麻呂』のその重厚な歌いぶりは、口から口へと伝わって、無意識のうちに菟野が神であることを既成の事実にしていくのだった。一方大嶋は事あることに神前で『天神賀詞』を読み上げる。大嶋の『天神賀詞』と『人麻呂』の歌がセットになって、繰り返し菟野が天照大神の化身であること、天照大神の子孫即ち菟野の子孫だけが皇位を継ぐべきことを、聞く者の脳裏に叩き込んでいく。

菟野を神として讃える歌を詠みながらも、佐留の胸の内は複雑である。浄御原宮大王に近侍していた佐留には、彼の考えが良くわかっていく。中大兄の弟でありながら天下を奪った大王としては兄弟相続を否定することは自身の即位を否定することにもなる。おそらく彼は病弱な草壁の後には大津や更には長、弓削の即位をも考えていたであろう。

だが時代は変わったのだ。大王にとっては皆自分の子だが、菟野にすれば夫の愛を奪った憎いライバルたちの生んだ子である。菟野が自分の血を分けた子孫にのみ王位を伝えようとするのもよくわかる。大津を殺した菟野に反発を覚えながらも、菟野のために歌い続けるのは、もちろん命令に逆らえな

いからである。と共に、神となってまで子孫に大王の位を継がせたいという、菟野の人間臭さに惹かれるものを感じているのかもしれない。

(このお方は、神を信じてはおられない。)

生きながらにして神と祀られた菟野と、死んで神になった佐留。菟野は神を信じてはいないが、佐留は勿論信じている。

そんな佐留を近待させながらも、菟野は長や弓削に親しい佐留を信用してはいない。だから今の佐留の身で、長や弓削に近づいてはかえって菟野の疑いの眼を長や弓削に向けさせる恐れがある。佐留は牟久売の元へ通うことも控えている。

牟久売もわかっているはずだとは思いますが、余りに離れているとお互い不安になる。時にはこんな歌を贈ったりもした。

雪こそは春日消ゆらめ

心さへ消へ失せたれや言も通はぬ

(1782)

牟久売からの返事。

松反りしひてあれやは

三栗の中上り来ぬ磨といふ奴

(1783)

怒って見せる言葉の端々に暖かい思いがこもっている。即座にこんな、気のきいた歌を詠んで返す妻が愛おしい。

佐留の足はいつの間にか牟久売の家に向かう。

「まあ、佐留殿。珍しいこと。余り立派におなりだから、私のことなどお忘れかと思いましたが。」

久々の訪れに皮肉を言いながらも、牟久売の熟した肉体は早疼いている。

「忘れるわけがないではないか。皇子様方の事は気になっているのだが。今は迂闊には動けぬ。皇子様方にもよくよく自重なさるように、そなたからもくれぐれもよく申し上げてくれ。」

佐留の家はもともと歌舞を掌る家である。佐留も若い頃からよく歌を詠

んだ。特に恋の歌のときめきは聞く者の心を惹きつけずにはおかなかった。

女たちは佐留の歌に恋する余り、佐留その人に恋い焦がれた。佐留の恋の遍歴はますます彼の歌に磨きをかけた。彼は常に恋に全身全霊を傾けて歌を詠む。だが、恋が歌という形になって成就すると、その恋は急激に冷めて、

また次の恋に涙するのだった。

だがこの牟久売だけは違っていた。歌人のみずみずしい恋心は、若く美しいこの乙女の姿に奪われた。だがすでに数々の浮名を流しているこの歌人を、乙女の親は許さない。海神わたつみの守る海底の真珠のように、近づくことのできない切なさを、歌い続けた佐留であった。堰かければ堰かれるほど歌人の恋心は燃え上がる。

牟久売の両親が相次いで世を去り、牟久売が大江皇女に仕えるようになって、ようやく、佐留の恋は成就した。夜な夜な牟久売のもとへ通ってくるこの高名な歌人の噂は、やがて大江の口から浄御原宮大王の耳にも達した。佐留が大王に召し出されたのは大王の即位後間もなくであった。大王は佐留の歌才を誉めて侍読じとくに任じ、『人麻呂』という雅号がごうを与えたのである。

佐留は若い時から歌の手本とするために、古歌をたくさん集めていたし、歌にまつわる物語も良く覚えていた。大王は佐留に歌物語の記録を命じた。これが当時大海人が進めていた正史編纂事業の資料のひとつとなったのである。佐留はこの功を認められて、物部麻呂ものべのまろ、中臣大嶋なかとみのおおしま、栗田真人あわたのまひとらと共に

小錦下しょうきんげに叙せられ、高級官人の仲間入りを果たした。

佐留はこの仕事を通して、当時修史事業に携わっていた川島皇子や忍壁皇子とも親しく交わるようになった。佐留はまた、侍読という立場から、皇子たちの歌の手ほどきにも当たり、宮廷歌壇の中心ともなっていた。彼のこうした華やかな生活も、基はといえば牟久売のおかげである。だから、牟久売は彼にとつて特別な存在でもあった。

「太后様が皇子様方を殺すとおっしゃるの。」

「わからぬ。まさかとは思うが用心するにこしたことはない。先頃来た新羅の使いの話では、唐では武后という先帝の皇后が、気に入らない者を次から次へと殺しているそうだ。庶腹の皇子は皆殺されたらしい。」

「まあ、恐ろしい。」

「太后はそんなことはなさるまいが、近江宮大王に似て、唐がお好きのようだからな。長皇子様はおとなしいから心配ないだろうが、弓削皇子様は無鉄砲だから用心しなければ。川島皇子様には俺から申し上げるが、そなたからも頼んだぞ。」

牟久売は不安気に頷いて身を寄せた。